法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

ドストイェフスキーとペトラシェフスキー--ペトラシェフスキー事件(2)

近田，友一

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要 / 法政大学教養部紀要
(巻 / Volume)
16
(開始ページ / Start Page)
23
(終了ページ / End Page)
38
(発行年 / Year)
1972-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005207

Hosei University Repository

ドストイェフスキーとペトラシェフスキー

——ペトラシェフスキー事件(II)——

近田友一

承前

ドストイェフスキー自身その供述の中でもペトラシェフスキーとの資質の相違に言及しているが、ペトラシェフスキーのある意味で極めて個性的な性格は会員との結合の要因として働いたと同時に、また反対に、感情的な離反を促進するそれともなったのである。カーはドーロフ(1)一派のペトラシェフスキーからの分離の原因を一派の思想面での過激性に帰しているが、彼等の供述やミリュコフ(2)の回想などからみてみると、最初から確固とした目的があったというよりも漠然とした感情的な溝が彼等を動かしたという感じの方がつよい。例えば、分派の一人パリム(3)はつぎのような事実をあげている。

「一度私はクルイロフ——わが寓話作家をめぐっての論争に加わった。論争はドーロフ君とペトラシェフスキーとで行われていた。ドーロフはクルイロフの天才に味方し、ペトラシェフスキーは彼を弁駁した。二人共不公平きわまりないところまで行ってしまったので、私はクルイロフについての私見を吐露すべき時だと思った——それはドーロ

Hosei University Repository

フの意見と同じだった。その時ドーロフ君、ドストイェフスキー君及び私はペトラシェフスキーに、彼が芸術を理解しなければならないということを何とか証明してやろうとしたのだった。この論争でわれわれ（つまりドーロフ、ドストイェフスキー、私）はすっかりペトラシェフスキーという人物がわかってしまった。それでその後は彼のことを無味乾燥な、感受性に乏しい人、世界全体を完璧なものにしようとする空想、滑稽なユートピアの空想の中に生きている人間と考えるようになったのである。」（「パリムの供述」[4]）

ペトラシェフスキーの個性に対する認識の深化が〝人間的な距離の意識〟の明確化を助長する――というような逆説な関係が彼と「心理的」分派との間に次第に成長してきたらしいことはこのパリムの言葉からだけでも充分推測出来る。彼等の眼にはペトラシェフスキーの学究然とした真摯な態度が鈍重なものに映り、彼の「牡牛」のような神経のみが浮び上がってみえてきたのである。

このような「心理的」分派が実際の分派に移行するまでにさして時間はかからなかった――パリムが名を挙げている者の他、三、四人の会員は自然、金曜会から足が遠のくような形になって、自分たちだけの集まりをもつようになった。最初彼等は分派の一人プレシチェーエフ[5]の家へ集まったらしい。スペシネフの供述、ミリュコフの回想から割り出すと、この集まりは四八年の十月ごろから始まって冬の三ケ月間、はじめは二週間から十日おき、その後は週に一度開かれた。ドーロフのもとに集まったのは四九年三月初旬であるというから（プレシチェーエフ及びドーロフの証言）時間的には前の集まりより短いが、主要な行動内容は殆どこの二ケ月足らずの間に集約されている。分派の人々の供述はこの間一貫して「文学会」――最初各人が何か文学論文をよみ、各自批評を加え、その後音楽を聴いた（ドーロフの供述）――としての性格の主張を変えていないが、会合の前期と後期では明らかに相違があり、彼等の

Hosei University Repository

供述は前期の会合の初期を意味しているものと考えればほぼ妥当であろう。フィリッポフ[6]は四九年三月から四月のはじめにかけて会の性格が政治的になったと証言しているが、分派の会合がドーロフの家に移されるころには文学青年の趣味は殆ど消えていたのである。

この間におけるドストイェフスキーの態度は他の被告の供述などから察すると、スペシネフとかかわる一点をのぞいては、文学趣味のぬけきらない名目上の主宰者ドーロフとともに最も穏健な立場をとっている。例えば、ゴロヴィンスキー[7]はつぎのようにのべている。

「ドーロフのところへは二度行った。丁度耳にしたのはドストイェフスキーのこんな言葉だ――〝二つの点に対して罪になるような行動をとるべきではない。社会を非難すべきではなくして、それに働きかけるべきである――癇癪と嘲笑によってではなく、社会自身の欠陥を示すことによって社会に働きかけるべきである〟。」(「ゴロヴィンスキーの供述[8]」)

亦、グリゴリエフ[9]の「兵士の話」と題するかなり傾向的な小説体の論文がよまれた際、ドストイェフスキーは極めて否定的な態度を示したという。

「彼が言ったのはこういうことだ――〝もし、我々が罪に問われるような内容の論文をよみ、罪に問われるような思想の伝播方法について論議を重ねるとすると、我々の夕べの集いは罪になる方向をとることになるだろう。やめにしようじゃないか。お互の顔を見るために集まるという単なる満足から罪になるようなことはしないようにしよう〟。」

Hosei University Repository

（同前）

この意見はみなの賛同を得た。全く反対意見は出てこなかった――ドストイェフスキーの言葉の後で出席者の一人が「今となっては石版石のことを口にする必要はなくなった」と言った、とゴロヴィンスキーはつけ加えている。

つぎにミリュコフの回想から引用しておく。

「サークルではただ当時禁じられていた革命的乃至は社会問題的内容をもった書物を手に入れてお互に交換したりしていただけであった。また、会話はその頃公然と論議出来なかった問題に大部分向けられていた。関心の第一は農奴解放問題で、夕べの集まりではいつもこの解放の方法と時期が論議された。（中略）この時誰かが合法的手段による農奴解放の可能性に疑問を呈したが、ドストイェフスキーは自分には他の方法は一切信じられないと語気鋭く弁駁した。（中略）

ドーロフのサークルには幾人かの熱烈な社会主義者がいた。西欧の革命家の人道主義的なユートピアにすっかり酔っていた彼等は、その教義の中に、いつの日か人類を改造し、社会を新たな社会原理の上に建設すべき新しい宗教の基盤を認めていたのである。ロバート・オーエンのニュー・ラナークやカベーのイカリヤについて、とりわけ、フーリエのファランステールやプルードンの累進税法論についての討議が時には夕べの会の大部分を占めた。我々はみな、これらの社会主義者を研究したが、そのプランの実際的な実現の可能性は少しも信じてはいなかった。ドストイェフスキーもまたその一人だった。彼は社会主義者の著作を読んではいたが、彼等に対しては批判的な態度をとっていた。ドストイェフスキーは、彼等の教義の根底には高尚な目的があったということには同意したけれど、しかし、彼

Hosei University Repository

等をただ正直な夢想家にすぎないと考えていた。特に彼は〝これらの理論はみな我々にとっては無意味なものであり、我々はロシア社会の発展のために、西欧の社会主義者の理論の中にではなく、わが国民の生活と何世紀にもわたる歴史的な制度の中に源泉を求めなければならない〟と主張していた。（下略）」（「ミリュコフの回想」[10]）

ドストイェフスキーの「穏健さ」は彼が夢想家の眼と同時に逃避家の知性を具えていたことに由来する――無条件的に「社会主義」に没頭するためにはドストイェフスキーは自意識家にすぎた。彼は〝ニュー・ラナーク〟や〝累進税法〟が農奴解放と何の関係もないことを知っていた――ユートピアと現実のロシアを同次元におくためには彼の眼は見えすぎていた……その対比はただ意地の悪い皮肉と映ったのである。

ユートピア思想は意識過剰な夢想家にとって、いわば、〝気つけ薬〟として役立った――「調和ある社会」への夢想を継続させ、前進させるエネルギーとしてそれは必要であった。だが、それ以上のものではない。ドストイェフスキーは、ロシアの問題はロシアの生活から割り出された方法によって解決されなければならないと信じていた。彼の唯一の罪状である「ゴーゴリ宛のベリンスキーの手紙」の朗読も、主体的にみれば、この信念の端的なあらわれに他ならない。

ドストイェフスキーはこの手紙を少くとも二度（ドーロフとペトラシェフスキーのところで一回ずつ）読んでいる――この事実は彼の関心の深さを示しているものとみて差支えなかろう。彼自身は供述書の中で、「単なる文学的な好奇心から読んだ」、「どちらに味方しているか明言してはいない」というような弁明を行っているが、これは全くとるに足りない。この問題は当時のドストイェフスキーの「社会主義」の内容に直接関係をもつものであり、彼の〝空想主義（ペチターナエリストヴォー）〟の本質ともかかわりを有しているが、この間の事情を明らかにするためには、ベリンスキーとドス

Hosei University Repository

トイェフスキーの半ば伝説化した宿命的な関係の再検討から始めなければならない。

『分身』以後ベリンスキーがドストイェフスキーに対して以前ほど情熱を示さなくなったのは事実だが、このことはむしろこの真摯な批評家の正直さをあらわしているにすぎず、それ以上の感情的な対立をさぐるのはかなり疑問の余地があると言えよう。たしかに、ドストイェフスキーは『祖国の記録』の主宰者クラエフスキーの「お雇い文士」となっていたために、敵対関係にあった『現代人』の事実上主筆ベリンスキーともこの関係の延長線上に位置していたようにみえる。しかし、当時のミハイル宛の書簡をよむと、ネクラーソフとはかなり激しい感情の対立があったらしいことはわかるが、ベリンスキーに対しては、「文学上の意見にかけては一週間に五度も金曜日がくる人」というように彼の弱気を責めてはいるものの、それ以上の感情は示していない。現にベリンスキー一派と絶交したといわれている四七年以降でもベリンスキーを訪問していたことが兄宛の手紙で知られ、『現代人』との喧嘩別れを知らせた書簡（四六年十一月二三日）中の言葉――「ただベリンスキーとは以前の通り交際を続けています。彼は潔白な人間です」――を裏書している。要するにこの当時のベリンスキーに関する言及が晩年のそれとは全く印象がちがうことは注意しなければならない。言ってみれば、『作家の日記』においてはベリンスキーとネクラーソフの位置がすっかり入れ替ってしまっているのである。「昔の人々」[11]で主張したげにみえるベリンスキーとの思想的な対立は論外としても、感情的な対立も――資質的なくいちがいは別として――それ程こじれたものがあったようにはおもわれない。『プロハルチン氏』以後ベリンスキーの評価はますます厳しくなっていったが、ドストイェフスキーにはこの批評を従順にうけいれていたようなふしが多々みえる（例えば、クラエフスキー宛書簡中の言葉――「『主婦』のごとき駄作をものし云々」などはこの間の事情を語っていよう）――ペテルブルク時代のドストイェフスキーはやはり、高名な批評家であり善良なヒューマニストであったベリンスキーの「信徒」であったと言えるであろう。

Hosei University Repository

「〝更生されたる世界〟の真理」[12]のロマンチックな使徒であったドストイェフスキーが、「ゴーゴリ宛のベリンスキーの手紙」――その「師」の言葉の中に最も信頼に値する指示を見出そうとしたことに何の不思議もない。既存の社会秩序を擁護し、神秘主義的な宗教的自己完成を説いたゴーゴリの一著作[13]を契機として語られた四十年代のロシア革命運動の目標の簡潔明確な指摘が、外国の社会主義者の文章とくらべて、地についた落着いた感覚をドストイェフスキーに与えたであろうことは想像に難くない。「ロシアにおける最もヴィヴィッドな現代の国民的諸問題は目下のところ、農奴制を廃止すること、体刑をやめること、既存の法律でもよいからせめてそれをなるべく厳重に実行することだ」といったような文句を「鈍い眠りの中にある全ロシアを重苦しくとらえている問題」の解決をねがう若い夢想家は情熱的に朗読したことであろう。この朗読はドストイェフスキーの唯一の起訴理由となったが、そこに感じられるものは革命運動とはおよそ似つかわしくないロマンチックな文学青年の姿であり、彼の〝空想主義(イデアリスト・ヴォー)〟の柔軟な若々しい情感である。「社会主義」への主観的な熱中が客観的には一層彼の文学趣味を際立たせるというようなドストイェフスキーの「革命思想」の本質が、このベリンスキーの書簡の朗読の中に象徴されているのである。

しかし、ドストイェフスキーの「社会主義」の、いわば、「オーソドックスな」解釈には異議をはさむ評家が多々ある。左翼的な偏向をおびた批評家は一応別として、ここではE・シモンズの見解をみてみよう。

「これらのサークルのメンバーをふわふわしたアイディアリストとして、また、彼等の改革のプランを全くの幻想として片付けることが今までの批評の慣例になっていた。彼等の間でドストイェフスキーが演じた役割もまた、よくは言われていないし、彼の精神的社会的発展におけるこのすべての経験の重要さは安く見積られすぎていた。（中略）ペトラシェフスキーの家で金曜日の晩ごとに朦々たる煙草のけむりの中で交わされた談話や演説草稿は一見したと

Hosei University Repository

ころ非実際的の内容にみえるが、そこには積極的な反逆の底流があったのだ。（中略）ペトラシェフスキーのサークルには空想家もいた。しかし、ただ行動だけを考えていた幾人かの者もいたのである。ドストイェフスキーはこの方へ極めて傾いていた。[14]」

シモンズはこの主張の論拠としてドストイェフスキーがアンナ夫人に語ったといわれる言葉（ストラーホフの『伝記』[15]所載）を引用している。

「社会主義者はペトラシェフスキーの徒から源を発している。ペトラシェフスキーの徒は多くの種子を蒔いた。その後の陰謀に含まれる何もかもがすでにこの種子の中にあったのである……秘密出版と石版、勿論、それは用いられはしなかったけれど。」（同前）

この言葉には妻君が後世に書きのこすことを予想したドストイェフスキーの計算が加えられており、この計算が言葉の信憑性をましているとシモンズは言う。しかし、それは『作家の日記』中の或る種の言葉を額面通り受けとるに等しい――シモンズがこれを知らない筈はない。ここには明らかに彼の腹芸がある――彼の主張のうらにはドストイェフスキーの秘密出版への積極的参加を語ったアポロン・マイコフ[16]の手紙が有力な根拠として働いているのである。

この手紙はヴィスコヴァートフなる人物の請によってかかれたもので、アポロンとしては自分の略伝を伝えるつもりのものだったらしい。このうち事件に関係のあるのはドストイェフスキーから秘密出版への援助を要請された経緯を物語っている部分である。

Hosei University Repository

「ドストイェフスキーは私に或ることを提案するように言われたのだという。ペトラシェフスキーは馬鹿で芝居気の多いホラ吹きだ。彼のところからは何一つまともなものは出てきやしない。彼の家へ集る最も実際的な連中はペトラシェフスキーの知らないようなことを計画しているが、どうせ彼はそれを受け入れはしないだろう――というような話である。連中というのはスペシネフ、フィリッポフ、その他忘れたが五、六人で、その中にドストイェフスキーも入っていた。で、彼は七番目か八番目かに私を呼び入れようというのだ。私は、そんな危険なことは軽率きわまる、破滅は火を見るより明らかだ、と証明してやった……ドストイェフスキーは丁度瀕死のソクラテスのような恰好で、夜着を着て坐っていたが、この仕事の神聖なこと、我々は祖国を救う義務があることなどを滔々と述べた。そこで私はしまいには笑ったり、まぜっかえしたりし始めた。〝じゃ、厭なんだね〟と彼は言葉を結んだ。」（E・ポクロフスカヤ『ドストイェフスキーとペトラシェフスキーの徒』）[17]

この手紙の内容は極めて微妙な意味を含んでいる――表面的、即自的に受けとれば、確かに、ドストイェフスキーの「積極的な」姿だけしかあらわれてこないが、事実はそれ程単純ではない。この手紙の背景にはドストイェフスキーとスペシネフの複雑な関係があり、この関係の検討を無視しては書簡の意味の真の所在は捉え難いのである。ここでは彼等の関係をさぐることによって帰納的にシモンズの見解を調べ、同時に事件全体におけるドストイェフスキーの姿勢を浮び上らせることが必要であろう。

ドーロフのサークルが実質的にはスペシネフのそれであったことは周知の事実であるが、ペトラシェフスキーのサークルの方に気をとられていた当局が、当時、この辺の事情をどの程度摑んでいたかは明らかではない。各被告への訊問から察すると、審問委員会の側でもスペシネフの行動はかなり気にしているものの、肝心な点はごまかされてし

Hosei University Repository

まったような印象がつよい。例えば、ドーロフがサークルの政治的偏向を供述したときも、その積極的な動かし手としてのスペシネフの名は故意に省かれているし、ドストイェフスキー自身も供述は専らペトラシェフスキー一人にしぼるといった風で、極力委員会の注意をそらし、手掛りになるようなものは何一つ与えていない。このようなスペシネフとの関係に対する彼等の細心な意識的な態度は、「神秘的な」スペシネフの姿を一層謎深いものにし、彼とドストイェフスキーの関係の推測を一層困難なものにしているのである。我々第三者の立場も問題の本質的な難解さに当面する点においては委員会とさしてへだたりはない。このことはスペシネフのイメージを捉えるためには予め承知しておく必要があろう。

『ペトラシェフスキー一派の哲学的ならびに社会・政治的著作』[18]の付録にはスペシネフの極めて簡単な略伝がのっている。

「ニコライ・アレクサンドロヴィッチ・スペシネフ（一八二一～八二）は一八三九年四月、学業半ばにしてアレクサンドル・リツエを退き、その後ペテルブルク大学の東洋語科を卒業した。一八四二年からペトラシェフスキーのサークルでの思想生活に積極的に参加した。

リツエを退いた後は〝各派の政治経済学者、社会主義者の著作〟にスペシネフは関心をいだいていた。彼はペトラシェフスキーの蔵書から借り出してマルクスの『哲学の貧困』も読んでいた。ペトラシェフスキーの言葉によれば、スペシネフは〝生涯を経済学に捧げた〟人間であった。」

スタヴローギンがペテルブルクでの四年間の秘密の過去を背負って我々のまえに現われたように、スペシネフは国

Hosei University Repository

外での秘められた生活とともに彼等の間にその貴公子のような姿をあらわしたのである。長身で端麗な顔立、肩の上に波打っている亜麻色の捲毛、幽かに哀愁をおびたような灰色の大きな眼――およそ風采のあがらない夫子然としたペトラシェフスキーとは皮肉な対照をなしているが、この容姿のコントラストはそのまま彼等の態度にも延長されていた。神秘めかしく寡黙で、自若としたスペシネフの様子と饒舌で絶えず動きまわっているペトラシェフスキーと……彼等のうちにスタヴローギンとピョートル・ヴェルホヴェンスキーの関係の原型を見ようとする評家[19]の悪戯心を誘ったのも決して理由のないことではない。

次にスペシネフを描いた数少い文章のうちからバクーニンの手紙を引いておく。

「彼は聡明で金持で教養があって美男で、極めて高貴な外貌、落着き払って冷くはあるが決して人好きのわるくない様子、あらゆる穏かな力のように人に信頼をおこさせる風采をそなえていた――頭のてっぺんから足のつま先までジェントルマンなのだ。男たちは彼に惚込むことは出来ないが（彼は余りにも冷淡で己に恃むところがあり、誰の愛も求めないようにみえる）、しかしその代り、女達は、老いも若きも既婚者も未婚者も、彼がその気になりさえしたらおそらく気違いのようになってしまうだろう……彼は多面的な、自若とした、人に隙を見せない心のマントを巧みにまとっていたのである」（傍点バクーニン）（グロッスマン『スペシネフとスタヴローギン』[20]）

バクーニン自ら傍点を施した個所はスペシネフの特徴を的確に捉えて余すところがない。特に最後の一点はこの無政府主義者の眼力の並々ならぬ鋭さを物語っている。素朴なペテルブルクの青年達に対しては、スペシネフのこの緻密に計算された「マント」は極めて有効であった――スタヴローギンの「神秘的な雰囲気」が「気難しい鈍物ども」

Hosei University Repository

の心を捉えたように、スペシネフの「マント」はドーロフ家に集る別派の連中を魅了したのであった。ヨーロッパの革命的な政治結社や労働団体との関係がまことしやかに噂され、彼の秘密な〝使命〟が不安と期待をまじえて臆測された……（実際のところ、彼の運動内容がどの程度のものであったかは今もってはっきりとはわからない。ただ、ペトラシェフスキー会会員のうちでもスペシネフは最左翼に位置し、その運動を原始キリスト教の形態研究の成果をとり入れた独自な秘密結社の形式で展開しようと意図していたことだけは確実とされている）。

この神秘的でロマンチックなアリストクラートの中に、ドストイェフスキーが彼の「イヴァン皇子」を見出そうとしたことは自然であった。だが、彼が確認したものはメフィストテレスに他ならなかった――ドストイェフスキーはスペシネフに自己の精神的支柱を見出そうとして、逆に自らの魂を失ってしまった。彼のスペシネフに対する傾倒と嫌悪の入りまじったような態度はこの間の消息を物語っている。いわば、このメフィストに憎悪をいだけばいだく程、益々惹きつけられてゆくというような宿命的な関係が彼等の間には成立していたのである。

秘密出版へのドストイェフスキーの積極的な参加の底流をなしているものはこの魅入られたような彼の〝位置〟である。ドーロフ派の最右翼に立っていたドストイェフスキーを「行動」にまで追込んだのは思想というよりもむしろスペシネフの〝磁力〟であった。このことはマイコフの手紙の上にゴロヴィンスキーの供述をかさねることによって自明なものとなろう。

「私がドーロフのところへ行ったとき（四月七日）、活版印刷についての一切の計画（万一この計画があったとしても）及び石版印刷に関するすべての計画は放棄された。一言つけ加えると、私の意見では、それが放棄されたのはドストイェフスキーの側から異議が出たからである。この時彼を援護したのは主人自身――自分の主宰する夕べの集ま

Hosei University Repository

りを法に触れるものにしたくはなかったドーロフとその他の多くの人々である。」[21]

さきにも、ネガティヴな逃避的な姿勢とポジティヴな希望的な姿勢の逆説的な交叉が金曜会におけるドストイェフスキーの本質的な姿勢を形成していることを指摘したが、この「供述」と「マイコフの手紙」との落差は彼の逆説的な姿勢の〝深化〟を象徴的に示していると言える――「隅っこ」を愛する人間の「善への渇望」、「行動への希求」は決して現実の〝行動〟にまで高まることはなかったし、「空想家」の眼は積極的行動に出ることの危険性を充分察知していた。しかし、スペシネフの〝至上命令〟は彼の一切の思想を否定した――すべては覆り、ドストイェフスキーは逆に白熱化した絶望的な情熱をこめて「仕事」に没頭した。現実的な行為の中に自己を投出すことによって自己を救おうとするこのディスペレートな試みの中には、ペトラシェフスキー事件におけるドストイェフスキーの決定的な姿勢があらわれているのである。

シモンズの見解の根本的な欠陥は問題を現象的単眼的にしか捉えていないところにある――彼はドストイェフスキーのポジティヴな方向の一面のみを見て、ネガティヴな姿勢を全く見落してしまった。最も積極的な行為と見えたものが、最もネガティヴなモチーフから出たものであることにシモンズは思い至らなかったのだが、事件におけるドストイェフスキーの位置を決定したものはこの二重性に他ならない。ドストイェフスキーの「社会主義」的思想がつねに、彼のこの時代の心身両面にわたる苦悩のうえによこたえられていたことを看過してはならない。

※　※　※

Hosei University Repository

逮捕がドストイェフスキーを救った――おそらく、これはパラドックスではないのだ。娘エーメの回想では、この間の事情についてやや悲壮味が押しつけられて書かれているが、記述の本質的な意味を疑う必要はないであろう。「クラフトの悩み(22)」は当時のドストイェフスキーに確かにあったのだ。

ペトロパヴロフスク要塞監獄での八ケ月にわたる生活は、肉体にはよい影響を与えなかったが、彼の精神をすっかり蘇らせた。ドストイェフスキーはこの新しい生命力を少年のみずみずしい生命感に溢れた一篇の物語を書くことによって自覚し獲得したのである。「僕は今ほど心の底から仕事をしたことはありません」と彼は兄に書いているが、創作への純粋な没頭が彼の精神に安定をもたらしたのである。「小さな英雄」はM夫人と同様に作者自身をも救った。このドストイェフスキーの生命感はニコライの残酷な死刑執行の「芝居」のおかげで一層深化した。「死」を体験した直後に書かれた文章――

「兄さん！僕はくよくよもしなければ落胆もしません。生活、生活は到る処にあります。生活は我々自身の中にあるので外にあるのではありません。人々の間で人間であること、ずっと人間として残ること、どんな不幸に陥ろうと悄気たり気落ちしたりしないこと――これが生活なのです。これが生活の目的なのです。僕はそれを悟りました。この考えは僕の血肉となったのです。……僕のうちに今ほど健やかな精神的な力がゆたかに湧き立っていることは、これまでにかつてない位です。……生活は天の贈物です。生活は幸福です。……

兄さん！誓って申しますが、僕は希望を失いません。自分の精神と心を純粋なままに保ってゆきます。僕はよい方に更生します。これが僕の希望のすべてであり、僕の慰めの一切です。」（傍点ドストイェフスキー）（一八四九年十二月二二日ミハイル宛書簡(23)）

Hosei University Repository

ドストイェフスキーはこの生活への信仰を唯一の糧として自己を「神秘な運命」が待っているシベリヤへと駆った——四九年のクリスマスの前夜、彼はお祭気分の灯火に輝くペテルブルクの街と過去の一切に別れを告げた。

途中、ドボリスクで六日間泊った。ドストイェフスキーはデカブリストの妻君たちから最大の好意を示された——彼女等からもらった聖書の裏にかくされていた二十五ルーブリは「死の家」で彼の肉体を救い、バイブルは彼の精神を救った。「若い頃私は聖書を読まなかった。しかし、私は聖書と離れなかった。いつかは聖書を必要とするだろうと予感していた」とドストイェフスキーはその小説の一人物の口をかりて言っている。彼の予感は正しかった。フョードルの脳裡に幼年時代の記憶が蘇り、この聖書は臨終の床までドストェフスキーの唯一の伴侶となったのである。

(1) セルゲイ・フョードロヴィッチ（一八一六—六九）退役八等文官。作家。詩人。
(2) アレクサンドル・ペトローヴィッチ（一八一七—九七）評論家。教育者。
(3) アレクサンドル・イヴァーノヴィッチ（一八二二—八五）近衛狙兵連隊少尉。作家。劇作家。
(4) S・バルク他編『ペトラシェフツィ事件』第三巻（一九五一）
(5) アレクセイ・ニコラエヴィッチ（一八二五—九三）詩人。
(6) パーヴェル・ニコラエヴィッチ（一八二六—五五）ペテルブルク大学学生。
(7) ヴァシーリー・アンドレヴィッチ（一八二九—七〇）法学士。元老院勅務の九等文官。
(8) (4) と同書
(9) ニコライ・ペトロヴィッチ（一八二二—八六）陸軍少将の息。騎馬擲弾親衛連隊中尉。
(10) T・ヴェトリンスキー編『同時代人の回想するドストイェフスキー——手紙と覚書』（一九一二）

Hosei University Repository

(11) 『作家の日記』一八七三年

(12) 『作家の日記』一八七三年「現代的欺瞞の一つ」

(13) 『友人との往復書簡選』(一八四七)

(14) E・シモンズ『ドストイェフスキー』(一九四〇)

(15) O・ミルレル、N・ストラーホフ『F・M・ドストイェフスキー——伝記・書簡・覚書』(一八八三)

(16) アポロン・ニコラェヴィッチ(一八二一—九七)詩人。ドストイェフスキーの親友。

(17) ドリーニン編『F・M・ドストイェフスキー——論文と資料』第二集(一九二二)

(18) V・エヴグラホフ編(一九五三)

(19) L・グロッスマン『スペネシフとスタヴローギン』

(20) (17)と同書

(21) (4)と同書

(22) 『未成年』

(23) A・ドリーニン編『ドストイェフスキー書簡集』第一巻(一九二八)